

変形性足関節症の最新の治療

超高齢社会の到来とともに、これまでは比較的まれと言われていた変形性足関節症の患者数が増加し、日常診療でも治療する機会が増えてきている。変形性足関節症の原因としては一般的には外傷後関節症が多いと言われているが、高齢者の変形性関節症では膝関節と同様に内反型変形性関節症が多くを占める。末期変形性足関節症の主観的な障害の程度は、同じ下肢の変形性股関節症と障害の程度は変わらず、外傷後足関節症では比較的若い人も多いために、生涯にわたり長期に障害が持続することになる。そのため有効な治療法を提案できれば恩恵は大きい。高齢者においてはピロリン酸カルシウムの沈着により関節症性変化をきたす例が増えており、著しい疼痛を訴えることもある。また、結晶沈着性関節症であるために、足関節だけではなく周辺関節にも注意を払う必要がある。

本特集では、最初に治療を考える場合の基本となる変形性足関節症の病態について述べていただき、最新の保存治療について、運動療法を中心に記述いただいた。手術方法に関しては、変形性足関節症ではアライメント異常が病態に大きく関わっており、各種骨切り術が解決法になる。しかし、そのコンセプトは骨切り術の術式により異なるため、術式について詳しく述べていただいた。また、末期関節症の治療法に関しては、主に足関節固定術または人工足関節全置換術が適応されるが、現在でもなお足関節固定術は若年者に対してはゴールドスタンダードとされる。しかし足関節固定術には様々な術式があり、関節鏡視下足関節固定術を中心に、その使い分けについても言及していただいた。人工足関節全置換術に関しては、現在わが国では3種類の機種を使用することができ、それぞれの機種のエキスパートの先生方に原稿を執筆いただいている。さらに2020年に人工距骨が保険収載され、それを応用したcombined TAAが多く行われるようになってきており、最後の項で執筆していただいている。

本特集を編集するにあたり、現状における変形性足関節症の最新治療の全容を把握できるように工夫した。皆様の診療の一助になれば幸いである。

(田中康仁)